

北の譜

聞き手 奥津義広記者(北海道新聞社)

⑤<チェレプニン賞>

「日本狂詩曲」仕上げる

北大を卒業したのが昭和十年。道庁の林務官となって厚岸森林事務所に勤めました。不景気で就職難のころでした。叔父がパラオ島にいたもんですから、そこに行きたいと行ってたんです。ところが、おふくろが文化映画かなんかでパラオを見て、「あんなところへ行くのか」と、とても寂しそうにするし、肝心のパラオ島の日本人採用が、この年から中止になってしまったのです。

厚岸では湾月町の五味旅館に下宿していました。仕事というのは林業関係ですから、夏は苗畑で松の苗を育て、冬は木を切って売らなければならない。だから、木の直径と高さを測って体積を出すというようなことをやってました。まあ、職員が少ないものですから何でもやりました。

この年完成した「日本狂詩曲」も「ピアノ組曲」と似たようなきっかけからです。

フェビアン・セビツキーというアメリカ在住のロシア人指揮者がいました。スカラ座で振ったり、フィラデルフィア弦楽オーケストラの常任指揮者だった世界的な人ですが、そのレコードを聴いて、三浦君とまた手紙を出したんです。知恵を絞り絞り偉そうなことを書いたものですから、「なかなか詳しくさだから作曲もやっているだろう。あるなら送って欲しい。ボロディン程度の、あまりモダンなものでなければやろう」と返事がきたんです。作品がないというのも残念だから書き出したんです。

音楽雑誌を見て応募

その前に、バイオリンのコンチェルト程度のもので書こうと思っていたのを、打楽器などを加えてオーケストラに直し、スコアを送った。これが「日本狂詩曲」です。ハープ二台、打楽器九人の大規模な三管編成で演奏される曲なんですが、しばらくして「ぜひ演奏したい」といってきました。で、各パートの楽譜を書き始めたんですが、今のようなコピーがありませんし、時間がかかっているうちに、チェレプニン賞コンクール募集が、音楽雑誌に出たんです。出そうじゃないか、ということになり、この「日本狂詩曲」を応募したんです。

演奏時間に制限があったので、第二、三楽章だけを出したわけですが、それ以来上演する時は第二、三楽章と決まってしまった。

チェレプニン賞というのは、ロシアのロマノフ王朝の音楽をやっていたニコライ・チェレプニンの息子さんと、ピアニスト兼作曲家のアレクサンダー・チェレプニンが設けた賞で、この年は日本の作曲家が対象でした。その前は中国が対象だった。二番目の奥さんが中国人ということもあって、アジアに関心があったんじゃないでしょうか。



▲昭和 11 年来札した、チェレプニン(左端)を出迎えて=札幌駅にて。

左から 2 人目が伊福部昭、右端は早坂文雄

国辱ものとクレーム

まあ、そんなわけで作品を送ったんですが、その時ひともんちゃくありまして。日本で一度応募作品をまとめた時、ある審査員が私の作品を「これはひどすぎる。国辱ものだから送るのをやめよう」といい出したのです。当時としては、音楽として認められていない、まあ、田舎風というか、日本の旋律から出来ていたりして、「とんでもない」というわけです。

大木正夫さんという作曲家が、「審査するのはパリで、とにかく送料も取っているのだから作品は送るべきだ」と一人で頑張ってくれて、「それもそうだ」とようやく送られることになった。

チェレプニン賞の知らせが入ったのは昭和十年十二月十七日で、この時も「間違いではないか」と問い合わせの電報がパリにいったほどです。「北海道の厚岸なんかには、オーケストラを書ける作曲家なんているはずがないじゃないかって」。

これらの話は戦前、大木さんと一緒に中国を旅行した時「おれのお陰だよ」と教えてくれたんです。

「日本狂詩曲」は次の年の四月に、セビツキーが指揮してボストンで上演されてます。初めの約束が実ったわけですが、チェレプニンとセビツキーは友達だったことを後で知りました。

昭和 60 年 4 月 2 日(火)夕刊

火曜ぷらざ